

「心の綺麗」考

— 西鶴『諸艶大鑑』から —

Point of contact 「Kokoro no kirei」

— SAIKAKU 『SHOENOKAGAMI』 —

進藤 康子

【要 約】

井原西鶴の『諸艶大鑑』の一節「心の綺麗なる事ばかりあらはし」を手掛かりとして、その手法の考察を論じる。この一節の持つ意味を詳しく解き明かすことにより、西鶴の作品作りの鍵となる部分が明確となると思われる。

その鍵となる部分の考察には、遊女の「実」「誠」「粹」の持つ趣きを、丁寧に掬いあげることが解明の鍵となるであろう。

西鶴は、遊女の世界を借り、遊女の次元から遊女の事を描いてはいるが、実は普段の人間一般に相通じる「綺麗なる心」の普遍性を描き切る、という西鶴の構想および自負と情熱が、執筆方針の出発点であったことを中心に論を進めていきたい。

キーワード：江戸時代、日本近世文学、井原西鶴、諸艶大鑑、実、誠、粹、遊女評判記、好色一代男、好色二代男、心の綺麗、浮世草子

1. 「心の綺麗なる事ばかりあらはし」考察の経緯

『諸艶大鑑』に関しては、これまでに様々な角度から詳細に説かれた多くの論考はある。しかしながら、その多くは『好色一代男』との類似点や相違点、あるいは、『源氏物語』『伊勢物語』『宇治拾遺物語』『大鏡』や謡曲等の古典からの翻案ぶりや、俳諧的手法の見事さ等の指摘に於いてであった。

特に山口剛氏の「西鶴について」、「西鶴好色本研究」、「好色二代男考」等々を下敷として、

その後の論述も、典拠、翻案、俳諧化など言い尽されたようであったが、そこに新たな提案をしたのが、井上敏幸氏の「忍び扇の長歌の方法」（国語と国文学50巻12号）であった。

これは、原拠と原素材と西鶴作品との間に距離を置き、原拠と目される素材がいかなる媒体によって処理され、作品化されたかという西鶴独自の創作手法をていねいに詳述した。

また、野間光辰氏は、作者としての自覚の有無の点に於いて、『好色一代男』は西鶴の自己救済・自己解放の転合書であったが、次のスタートになる『諸艶大鑑』に於いて、作者として、読者

に対する奉仕を謳っている。(「西鶴と西鶴以後」)との見解を示された。

また、「射て見たが何の根もない大矢数」を、当時の西鶴の心境と考え、しかるに、西鶴の俳諧との決別、浮世草子への転向は決定的なものになり、それは一方において『諸艶大鑑』に於ける作者態度の確立(「西鶴の転向」となった、と発言された。つまりは、浮世草子への転向とその構想への思いの問題として内在する諸問題を、新たに再検討する必要性を、明示された発言だといえよう。

2. 作者態度の確立

では、『諸艶大鑑』に於ける作者態度の確立とは、具体的には、いったいいかなるものであろうか。

そこで、まず、『諸艶大鑑』の序にあたる部分、巻一の一「親の顔は見ぬ初夢」に於いて、西鶴の執筆姿勢を考えていきたいと思う。ここには、西鶴の作者として読者へ提案の原点があるのではないかと思われる。そしてその中でも、特に「心の綺麗なる事ばかりあらはし」の一節を素材として、西鶴の創作の構想の原点をより深く探してみたいと思う。

結論を先に述べれば、巻一の一の最終部分の「見及 聞伝えしは 松の葉の塵なれば 祇園箒の跡までも 心の綺麗なる事ばかりあらはし よしなきことは はき捨る物にぞ」のこの一節は、西鶴が「鑑」と銘打った「鑑」たるべき書物の著述態度の宣言と考えてよいのではなかろうか、という試論である。以下、実証していきたい。

この「心の綺麗」の言葉の持つ意味に焦点を当てると、日葡辞書には「(Q I R E I) いさぎよいこと」とあり、その他の辞書類にも「すぐれて、うるわしいこと。清潔なさま。綾のように美しくはでやか。あざやかなさま。きれいでうつくしいさま」などがあり、つまり「抜きん出て、麗しく、いさぎよい、あざやかな心」などを示していることになる。

しかるに、それ以上に、西鶴がこの一節に託したかった物があるのではないだろうか。

まず、『諸艶大鑑』における「心の綺麗」に関連した記述の一例を次に挙げる。

- A 巻一の四 「心の駒」
- B 巻一の四 「心を入れて釘付けの枕」
- C 巻三の二 「わが心玉」
- D 巻三の四 「心入のうるさし」
- E 巻四の二 「心玉が出て身の焼印」
- F 巻四の四 「心の月もさし入」
- G 巻七の一 「心はこゝろに移る鏡のごとし」
- H 巻七の一 「いやらしからぬ心ざし」
- I 巻七の五 「人の心は花になりて」
- J 巻八の四 「心の友を同行して」
- K 巻八の五 「心は帥の鬼となって」

上の心の表現より、西鶴が、どのような「心」の素材を、如何に用いているのかを吟味し、考察することが必要だと思われる。

Cの「心玉」は、魂魄、一念。「私の一念にもせよ。思いの浅くないその誠の心の印をおめにかけてよう」といった意であろう。

Dの「心入のうるさし」の「心」は根性がいやらしい、心根がみつともない、気心がいやだ、人の嗜むべきことに反するといった意であろう。つまり、心遣いのなさ、心の趣きなさがいやなのである。後に続く「兎角物をやらいではおかしからず。物くるゝ友と法師が書しも、尤の草紙ぞかし」の文意を引き立てる。

Hの「心ざし」は、「心のいさぎよき」で、一夜かぎりの客も見捨てぬ、実を持ったやさしい人

柄をも示し、後で述べるGの「心はこゝろに移る鏡のごとし」と呼応させている。

Aの「心の駒を乗り沈め、魂に合点させて」の「心の駒」は、はやる心をおし静めて自分で自分の暴れ馬のような心納得させていく姿があり、「心の駒に手綱ゆるすな」という諺をふまえて、馬がはやりたって押さえがたい様に、情意のなんとも抑えがたいことを表現している。

Jの「心の友」は、巻一の一の「見る世の友」に対する『徒然草』のパロディー「独り灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞこよなうなぐさむわざなる」の「見ぬ世の人」との対比を思い起こさせながらも、同じ情趣を解する友の意としている。

Fの「心の月」は、「心が澄み渡るような月」。これは、その背後に、「心が澄み渡るような話」が今から始まる予感を思わせながら、実は、「心の月」は、利兵衛の思い人「花月」へと通じはしまいか。

それは、後で「心をつくします御事」つまり、それ程までに利兵衛さんが私に心を尽くしくだされているのであれば、あなたがいやしい身分だからと言って、おろそかにはいたしませんまい、と逆にきっぱりと花月に言わせた、花月の一筋の誠の心へと続くのではないか。

B「心を入れて釘付けの枕」は、巻一の一の四の目録題であり、その冒頭に「此里の事は、皆偽りかとおもへば、折ふしは、まことも降り、時雨も、初めの薄雲ほど情ふかきはなし」とあり、その「心」は「まこと」を引きつけている。

その「まこと」の裏付けの線上に、藤原定家の歌からの連想で「いつはりのなき世なりけり神無月誰がまことよりしぐれそめけむ」（『続後拾遺集』）があり、これは、「真心から時雨ならぬ、まさにまことの涙の降る事もあるのでは」と言わしめている。

そして、「まこと」から「情ふかき」が想起され、太夫の真心と情け深さへの賞賛が、「心」に付加価値を加えていく。つまり、「偽り」から「まこと」、「まこと」から「時雨」、「時雨」から「薄雲」、「薄雲」から「太夫」、「太夫」から「情ふかき」まで含む意味の拡充と広がり

みる事ができるのである。

kの「心は帥の鬼」の「帥」は「粹」に通じ、心の表裏を熟知した粹の域にまで達した者を表している。

当然ながら、粹の域にまで達した者にとっては、相手も当然熟知した真の粹の心を持つ者でないと、到底満足しない。極上の太夫に出会うまで、学問を追求するかのごとく厳選し、厳しく追い求める様を示している。

このようにして「心」の事例をいくつか見ると、Gの「心はこゝろに移る鏡のごとし」の「鏡」は、まさに題名の「鑑」の構想のポイントを暗に示し、作者の本領が見え隠れしているところであることが予想されてくる。

いま、これらの事例の上に立って、内容的な面を見ると、確かに、AからKまでに跡付けされた「心」を、巻一の一「心の綺麗なる事」で包括して示されてきていると思われる。そして、Bの「心」↔「まこと」、Gの「心」↔「鏡」へ至る連想を軸として、この作品の跋にあたるころのKでは、「心」↔「粹」へと至らしめている。

さらにまた、「世を先だちし太夫ども、年月の御恩此度と、諸々の菩薩に姿を替、八葉の小蒲団にすくひ取給ひ」として、太夫どもを「菩薩」にまで引き上げることにより、さまざまな人の心は救われる。

3. 西鶴の「きれいなる物」

ところで、寛永九年刊『犬の草紙』上之巻七に次の様な記述が

「きれいなる物の品々」

路地に水うちたる

あを竹のぬれえん……（中略）

笥の山水

若衆の齒の白き

をんなの身の白き……（中略）

こほりざたう（氷砂糖）

もしあらば

むよくの人
けんじんのこゝろ
池のはちす

とある。

「きれいなる物の品々」の中に、「もしあらば」と前置きして

「むよくの人」「けんじんのこゝろ」、つまり「無欲」や「賢人」を「綺麗」に内包させていたことがわかる。そして、西鶴はそれを更に、遊女のみこと、遊女の鑑、遊女の帥に照らし合せ、ひいてはそれらを、人の心のみこと、人の心の鑑、人の心の帥へと導き、普遍性を持つより高い文芸作品へと持ち上げることをまさに意図したと思われる。

西鶴の創作精神とその変遷については、かくて中村幸彦氏によってその流れが 次の様に総括的に述べられている。「談理の傾向のうかがえる頃から、西鶴の作品には、「人心」とか「世の人心」とかそれに、類似の人間の心に関する語を上げて感慨、所見を披露することが多くなる」（「西鶴の創作意識とその推意」）と示唆されている。

さらに、それに加えて精査するならば、「談理の傾向のうかがえる頃から」をもっと絞っていくと、この出発点は、貞享元年出版の『諸艶大鑑』あたりからではなかろうかと推定することができよう。

つまり、心の綺麗なる人、心の鑑たる「まこと」を追求しようとした西鶴の意欲といったものが『諸艶大鑑』の創作あたりから徐々に表出されているようである。

そして、その心意気の変遷していくことは、貞享三年刊『本朝二十不孝』前後で、「さりとはしれぬ物人ぞかし」や「人の心の程かはり易きはなし」などに於いて知る事ができる。

即ち、人の心の知り難く、移り易く、なかなか把握できぬものだとして西鶴は感じていたようであることから知れる。

また、中村氏は、元禄元年刊の『可笑記』序「笑ふにふたつ有、人は虚実の入れ物」を取り上

げて、西鶴が虚実の二面で人間の心を捉えようとし、「寓言と偽とは異なるぞ。うそなたくみそつくりごとな申しそ」（元禄三『団袋』）の意味深い言葉をはく晩年には『世の人心』と名付けた作品を計画していたことを指摘されている。

つまり、西鶴の永遠のテーマ「人の心」を追究することにより、西鶴自身の所見の変化、人間観の変化といったものも読みとっていけるだろうことが推察できる。

さらに、人は「虚と実」、「偽と誠」、「悪と善」など相対する二つの面を持って心は現れるから、はたして、西鶴が世の人心を絵描き得たかと自から思ったかは否かはわからないが、「迷いは迷いとして、人はわからないものだ」と突き放したところ」に、かえって、人間への無限の広がりを獲得できることを知る、という図式になる。

また、中村氏は、西鶴も一度は規範的な道徳律のもとで即ち固定の相で人間を見ようとして失敗した、それが一段と西鶴を磨いたであろうことを述べられている。

4. 遊女の「実」「誠」「粋

『諸艶大鑑』に於いては、意欲的に人の心の綺麗なる事だけを書き集めようとの試みがあり、創作態度のはっきりとした提言は、自信にさえ満ちている。

人間の心を酌めども酌めぬものだとの困難さを知り尽くしたその後に、やっと、その困難ささえも丸ごと享受した西鶴があった。

加えて、中野三敏氏は「遊女評判記研究—西鶴文学の一基盤」（近世文芸）の中には、「心の綺麗なる」の一節を例にひかれて「西鶴の高度な精神の緊張があつてこそ、実用的遊興論が文学と成り得た」、「遊女への同情と誠実の積極的肯定の精神に支えられ」て偉大な文芸作品と到達していった事など新たな示唆を与えられた。

まさに、この『諸艶大鑑』の構造を見て行くと、遊女世界の間から発信した文学でありながら、西鶴の真摯な執筆態度および人間観察への思慮深い眼差しが見えてくるのである。

それは、中野氏の示唆された、遊女への同情と

誠実の積極的肯定の精神が西鶴の根本精神であり、それを言いかえるなら、「言葉を磨き」、「しぐさを磨き」、「誠を磨き」、「無欲を磨き」、「賢人の心を磨く」遊女に対して、「敬意をいただき接する」からこそ、誠と実のある見方ができるのである。

しかも、最も重要なことは、雅俗のなかで特に俗的なものとみなされていたこの遊女の存在が、実は「雅の領域」にも匹敵する価値ある存在であることに気付き、遊女だけの世界に納まらぬ高みへと導いていける精神を鍛えていたことこそが、西鶴の持ち味でなかったかと考えられるのである。

そうであるからこそ、Kの巻八の五の「心は帥」で述べたように、遊女を最後に「菩薩」にまで昇華させ、太夫どもの心を救ったのだと思われるのである。

要するに、「心の綺麗なることばかりあらはし」は、西鶴の『諸艶大鑑』の主題であり、かつ、作品作りの基本方針、根本精神であると言ってよからう。

そして、そのテーマは、具体的には遊女の「実」「誠」「粹」の情趣を酌み上げることにあった。そして、それを文字通り「鑑」としてこの作品に普遍性を持たせることであつたはずである。

その結果が、巻一の一で「柳の九市が『内証論』小堀奉仕が『まさり草』、よしなが染の宗吉が『白鳥』にも書つくせず、其後、一条の甚入道が『遊女割竹集』にもすいりやうの、沙汰多し」と言わしめたのだろう。ここに、強気の姿勢、つまり、そこらの遊女評判記とは違うのだという自信と誇りとが見えはしないだろうか。

5. 「鑑」

このように内容の面から、さらに、一步踏み込んで見ていくと、遊女の世界を借りて、人間一般の「綺麗なる心」の普遍性を描き切るという自負と一筋の情熱が、西鶴の執筆方針の出発点にあつたであろうことが推察できよう。

西鶴の言葉を借りるなら、

祇園箒で掃き清める様にして、心に残る真実、

つまり、心の誠や、心の粹で、綺麗な人のはなしばかりを集めて書き表わした。

逆に、野暮ったい話は掃き捨てる事にした。京の粹人たち、太鼓持ちたち、駕籠屋の親方までもこの本を当世のなぐさみ草にしようと思えば、きっとこの本がいい友達となり役立つこととなるう

ときっぱりと宣言した西鶴。

しかも、それに加えて、西鶴のリズミカルで動きのある文章、場面の転回の早さは、読者を飽きさせない。登場人物がなぜかいつもスピーディーに動く、いや、動き回っている。動きの有るものは魅力的で生き生きとしているとでも言いたげのようだ。

内容は、重みのある心の誠を文章に写しながらも、その文章は軽やかで、読む者を引きつけて離さない。そういった西鶴の豊富な語彙力や、人間観察力、ウイットに富んだ発想力を感じつつも、それ以上に西鶴のもっと内部の妥協のない緊張感といったものがしっかりと伝わってくるのである。

鍛えぬいた文章力と、動じない精神世界の両輪で、遊女の心の価値を題材に、まさに人間としての真実と真心の普遍性を描く崇高な芸術となるべき作品を創り上げたからであろう。

以上、「心の綺麗」を手掛かりにして、人としての普遍的な心の「鑑」を創り上げた西鶴理念の一端の考察を試みた。『諸艶大鑑』は、文章のリズム、スピード、俳諧的滑稽観を兼ね備えた美文である。とともに、精神世界の面でも、内的精神のレベルの相当高い、また芸術的にも洗練された思考のもとに育まれた作品であることに加えて、「心の綺麗なる事ばかりあらはし」と宣言したことによって、その一節は、西鶴の執筆態度の緊張のレベルを、ますます自分で引き上げることになったのではなかったかとの結論に達した。

しかるに、遊女の「実」「誠」「粹」を酌み上げ、作品に普遍性を持たせた力量は、『諸艶大鑑』の「鑑」と銘打った「鑑」たるべき書物の、真摯な著述態度と、より深い人間観察の眼差しで捉えた魂の叫び「まこと」を内包する「心の綺麗」を丁寧な掬い取るという信念から迸り出たも

のと言ってよいであろう。

そして、この「心の綺麗」が向かうところは、やはり、Kの巻八の五の「心は帥」で遊女を最後に「菩薩」にまで昇華させ、太夫どもの心を救わせた趣向であり、遊女への敬意を忘れない視線で捉えた「澄み渡る心」であり、それに加えて、Iの巻七の五で、西鶴がさりげなくちりばめて置いた一節「人の心は花になりて」の心の花なのではなかろうか。

【参考文献】

- 1 野間光辰 「西鶴と西鶴以後」
『西鶴新考証』（中央公論社 1952）
- 2 山口剛 「山口剛著作集」
（中央公論社 1972）
- 3 井上敏幸 「忍び扇の長歌の方法」
（『国語と国文学』50巻12号 1973・3）
- 4 中村幸彦 「西鶴における創作意識の推移」
（文学研究 九州大学大学院人文科学研究院 編
1959・7）（『中村幸彦著述集』所収）
- 5 中野三敏 「遊女評判記研究—西鶴文学の
一基盤」『近世文芸第8』（1962・11）